Monthly Contents（月刊誌の主な特集記事）

ザ・クインテッセンス／2012．12月号

○特集「GPのためのDigital Dentistry up to date 今，何ができるのか？これから、何ができるのか？」
（監修：風間龍之輔　著：風間龍之輔／依田慶太／青　藍一郎／山崎　治／岩城有希／鈴木　彰／夏堀礼二／Alessandoro Devigus／井高沙織）

＊上記の著者が5つのPartに分かれてCAD/CAMのシステムやマテリアル、使用状況、展望について述べている。具体的には，現在利用されている歯科技工所完結型、センター加工型、チェアサイド完結型などの製作システムについて各メーカーが扱う補綴物、使用材料を紹介している。また、それらの材料をどのように加工するのか説明している。さらに医院で導入する場合　どのシステムを選択すればよいのか、そしてCAD/CAMシステムを導入したユーザーが院内での取組みの事例を紹介している。今後，CTデータからインプラント用サージガイド製作や補綴物製作、口腔内光学印象がシリコーン印象に代わるなど歯科診療システムが根本から変わっていくことが現実であると理解していく必要があるだろう。

○Recipurocal motionによる根管形成　Single File Systemが根管処置を変える
（中川寛一／荒木謙太郎／大迫拓也／藤田智大）

＊根管形成において根管充塡に必要なテーパーを根管に与えるためには、ISO規格のSSファイルで15回以上交換する必要がある。Ni-Ti製ファイルでも従来法では数本のファイルで根管形成を仕上げるための煩雑さは避けられない。現在、細い根管に対して一本のファイルで根管充塡に必要なテーパーを与えるシステムとしてRECIPROCならびにWaveOneという２種類のファイルがある。reciprocal motion（連続的な繰り返し運動）理論を解説し，シングルファイルプレパレーションの可能な機器として臨床応用されている術式、特性、注意点などを紹介している。

日本歯科評論／2012．12月号

○<特集>インプラント治療のわかっていること，いないこと（Ⅰ）
ーメインテナンスを踏まえたインプラント治療をどう考えるか（中川雅晴　皆川　仁　他）

＊まだまだインプラント治療においては明確なエビデンスが定まっておらず、臨床が先行していることが多々あります。本特集は現在においてインプラント治療の方法や考え方を再考した企画です。2部構成で、今月号はインプラント体の表面性状や表面構造、抜歯即時埋入の適応症例と基準、インプラント周囲の粘膜についてなど詳しく解説しています。インプラント治療をされる先生は必見です。

○開業歯科医が実施する口腔がん検診の一例　（久山佳代　木村利明　他）

＊我が国における口腔がんの死亡者数は微増しています。そして我々歯科医師が発見できるがんでもあります。しかし口腔がんに関しては直視できる場所ながら発見時に多くは進行がんである場合も少なくありません。一般開業医が取り組んだ口腔がん検診について解説しています。是非読んで口腔がんに対しての診かたを参考にしていただきたいと思います。

デンタルダイヤモンド／2012．12月号

○スペシャルシンポジウム：インプラント周囲炎（開業医にできること・すべきこと）
（松坂賢一、依田泰、木津康博、中村杜綱、土岡弘明）

＊この特集では、インプラント周囲炎の原因は細菌と咬合力に対する組織応答で、インプラントと天然歯の組織学的相違点から、インプラント周囲において容易に進行すること。次に、生体はインプラント周囲にも生物学的幅径を獲得するため周囲炎を予防するために考慮すること。さらにインプラント周囲炎を早期に発見するための、周囲組織の評価シートを用いた審査・診断について解りやすく解説しています。対談では、現時点での様々な処置・対応法を考え、今後の方向性も示しています。自分自身がインプラント治療を行わなくても、歯科医師として、インプラント周囲炎に対する知識と対応法を身に付けておく必要がありますので、転ばぬ先の杖として、すべての先生に一読をお勧めする内容です。

○歯科臨床　次の一手：顎関節症２奏功するスプリントはここがポイント（小出　馨他）

＊大学で受けた教育だけでは、「実際の臨床で治療に不安がある」との歯科医師の意見を受けて行われた連載「顎関節と咬合に強くなろう」の最終回です。まず、使用頻度の高いスタビライゼーションスプリントの製作についてと設定の方法を詳細に、そして最終的な治療のゴールの方法を示しています。さらに、スポーツマウスガード作製のポイントについても記載しています。この連載は非常に詳細でありながら理解しやすい内容でした。是非、通して読んでいただきたい連載でした。

歯界展望／2012．12月号

○力を読む　１咀嚼時痛と非機能的な力　（倉田　豊）埼玉県開業

＊最近「力」についての本を目にする機会が増えた。以前　北九州市の筒井昌秀先生が「炎症と力のコントロール」という概念で、ご講演されていたが、今ではほとんどの臨床家が実感として感じているのだと思われる。筆者は筒井塾の講師の１人である。まず力とは何かを「静的な力」（咬頭嵌合位）と「動的な力」（下顎運動時）に分けて説明している。その後、治療の対象としての　非機能的力の、診査について述べている。実際の症例は写真付で、具体的に診断、治療法を提示しわかりやすいと思う。特集は睡眠時無呼吸症候群への対応で、歯科だからできる検査・診断・治療を詳しく取り上げている。きっとお役にたつと思います。